SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

まえがき

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学人文学部社会学科文化人類学コース 公開日: 2011-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 原, 知章 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/6324

まえがき

私たち静岡大学人文学部社会学科文化人類学コースには、3 年次の授業科目として、静岡県内の特定の地域を対象にして調査実習を行なう「フィールドワーク実習」という科目があります。この報告書は、平成 23（2011）年度のフィールドワーク実習の成果をまとめたものです。フィールドワーク実習は、文化人類学コースのカリキュラムのなかで核となる科目であり、3 年生は原則として全員履修することになっています。授業のテーマは、「地域で学ぶ、地域を学ぶ、地域を通して学ぶ、そして学びの成果を地域にお返しする」ということです。文化人類学の方法論を地域で学び、また、地域の歴史や文化そのものを深く学ぶ。さらには、日本全体や、あるいは世界で現在問題になっているような事象を、地域を通して学び、そしてこれらの学びの成果を多少なりとも地域にお返しする、ということです。東日本大震災、そして台風や豪雨による被害など、大規模な災害があいついだ今年は、多様な自然環境と歴史・文化からなる日本列島における暮らしのありかたを地域の目線で見つめ直すことの重要性を、そして私たちが取り組んできたフィールドワーク実習の意義を、あらためて考えさせられた一年でした。

私たちはここ数年、南アルプスに源を発し、静岡県中部を貫いて流れる大井川の中上流域に位置する榛原郡川根本町で調査実習を行なってきました。かつて「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」と詠われ、東海道随一の難所とされた大井川ですが、第二次世界大戦後、次々とダム式発電所が建設されたことにより、その豊富な水量は激減し、流域の市町村は大きな影響を受けてきました。今年度の実習は、その大井川をさらにさかのぼった位置にある静岡市葵区井川地区で実施しました。今年度は、教員 3 名のほか、3 年生 17 名、ドイツからの留学生 1 名の計 21 名が実習に参加しました。6 月 12 日から 18 日にかけての 7 日間、観水荘という旅館で 1 週間お世話になり、寝食を共にしながら現地調査を行ないました。また、実習の最終日にあたる 6 月 18 日には、井川生涯学習交流館で調査成果の現地発表会を行ないました。

現在は静岡市の一行政区域として位置づけられている井川ですが、かつては独立した行政村でした。さらに時代をさかのぼれば、井川は、中世末期以降、長らく海野氏という豪族が「井川の殿様」と称せられるほどの威勢を誇っていた地域でした。また、昭和の初期から戦時中にかけては金の採掘が盛んに行なわれ、当時は「ゴールドラッシュ」と呼べるような活況を呈していたといいます。その後、昭和 30 年代に大型のダムが建設されたことを契機として、井川は大きな変貌を遂げていきました。現在の井川は、日本の他の多くの中山間地域と同様に、急激な少子高齢化と人口減少に直面しています。学生たちは、この井川で、5 つのグループに分かれて、生業、流通、ダム、少子化、観光というテーマを掲げて調査に取り組みました。調査を進めるなかで見えてきたのは、一見するとあまり接点をもたないようにも思えるこれらのテーマが、実は相互に密接に関わっているということでした。学生たちは、井川の歴史と文化を学ぶことを通じて、対象となる地域や人びとをまるごと理

解しようとする文化人類学の視点を「体得」できたのではないかと思います。

今年度、井川で調査実習を行なうにあたっては、最初に私たちの受け入れ窓口となってくださった望月スミエさんをはじめとする井川支所の皆さん、井川自治会連合会会長の栗下浩信さん、井川幼稚園、井川小学校、井川中学校、そして観水荘の皆さんをはじめとする多くの方々に大変お世話になりました。お名前を挙げることができなかった皆様をふくめて、ここに記して厚く御礼を申し上げます。

なお、本報告書の刊行にあたっては、静岡大学人文学部学部長裁量経費の助成を受けました。本報告書の内容は、下記の URL からもご覧いただけます。

http://www.hss.shizuoka.ac.jp/shakai/bunjin/fieldwork.html

2011 年 12 月

原　知章

静岡大学人文学部社会学科文化人類学コース教員

原　知章

大野　旭

小松かおり